

親子関係と青少年の非行的態度Ⅲ
——親からみた親子関係と恥意識の形成——

中村 真*・松井 洋**
堀内 勝夫***・石井 隆之****

Parent-child Relationships and Attitudes toward
Delinquency in the Youth III

Shin NAKAMURA, Hiroshi MATSUI, Katsuo HORIUCHI, Takayuki ISHII

要 旨

我々は、青少年を対象とする継続的な調査を通じて、恥意識が非行的態度を抑制する強力な要因の一つであること、および、非行抑止要因としての恥意識が親子関係を基盤にして形成されることを明らかにしてきた(中里・松井, 2003, 2007など)。しかし、これらの知見は、主として、親子関係を子どもの視点から把握することによって導かれたものであり、親の視点が反映されていなかった。本研究では、親子関係の良否と子どもの恥意識の高さの関連を、実際の親子を対象に実施した調査に基づいて親の視点から明らかにすることを試みた。その結果、親からみた子どもとの関係の親密さが、非行的態度を抑制する恥意識の形成に寄与することが示された。また、一部の恥意識においては、父親自身の恥意識が親子の親密な関係を介して、子どもの恥意識と相関することが示唆された。これらの結果から、子どもの恥意識を形成するうえで親がどのような役割を担い、どのように影響するのかを考察するとともに、今後の研究課題を検討した。

キーワード：親子関係、恥意識、心理的距離、非行抑止要因

*准教授 社会心理学

**教授 社会心理学

***産業能率大学

****日本・精神技術研究所

【問題と目的】

われわれは、青少年の価値観、思いやり意識、親子関係などに関する縦断的な国際比較研究を行い、諸外国に比較して日本の若者の意識や態度が多くの側面において悪化していることを示した。また、その原因が親子関係の希薄さにあることを実証している（中里・松井, 1997；中里・松井, 1999；中村他, 2002；中里・松井, 2003；中里他, 2003；中里他, 2005；中村他, 2004；松井・中里他, 2005；中村他, 2005）。

ただし、これらの知見は、親子関係の良否を子どもの視点から把握したものであり親の視点が反映されていなかった。そこで、中村・松井・堀内・石井（2007）は親子関係の良否と子どもの様々な意識・態度の関連を親子双方の観点から検討することを試みた。その結果、子どもからみた親子関係の親密さが子どもの道徳意識、恥意識、愛他性、価値観に肯定的な影響を与えるとともに、自らの非行的態度の抑止に寄与していることを明らかにした。そして、親からみた子どもとの関係の親密さも親の（子どもに関連した）道徳意識や愛他性に関するしつけを促すとともに、子どもの虞犯や非行を許容しない態度の形成に貢献することを示した。

しかし、子どもの恥意識の高さと親子関係の関連性については、親の視点による検討がまだ十分に行われていない。その原因は、両者の関連を確かめるためには欠かすことのできない親子のマッチングデータが得難いことにある。これまでの研究により、恥意識には、子どもの非行的態度を抑制する機能があることが明らかとなっている。そして、親子関係と子どもの恥意識のあいだに関連があることが確かめられている。具体的には、親子間の心理的距離が近い子どもほど非行的態度の抑止要因としての自分恥と他人恥が高かったのである。ただし、先述したとおり、これらの結果は子どもの視点から捉えたものである。言うまでもなく、“恥意識は親子の親密な関係によって形成される”ことをさらに実証するためには、両要因の関連を親の視点においても確かめる必要があるだろう。そのためには、これまでと異なり、実の親子を分析の対象としなくてはならない。なぜならば、親から見た親子関係の良否とその子どもの恥意識の高低の関連は、実の親子を対象にして分析しない限り確かめることが難しいからである。

本研究では、親子関係の良否と子どもの恥意識の高さの関連を、実際の親子を対象に実施した調査に基づいて親の視点から明らかにすることを試みる。それによって、親子関係の良否をどちらか一方の見方ではなく、両者の視点で総合的にとらえることが可能となり、親子関係と非行を抑止する態度の関連をより正確に把握できると考えるからである。

なお、本研究が分析の対象とした親子対応データのサンプル数はあまり多くはないが、親の視点における親子関係とその実子の恥意識の関連性を検討するうえで貴重な示唆を与えてくれ

るものであると考える。

【方法】

【調査方法】

①中学生の調査

事前の調査依頼に対して承諾が得られた学校に質問紙を送付し、本研究の共同研究者が分担して、クラス単位で集合調査を実施した。あるいは、ホームルーム等の時間帯を利用してクラス担任の教員に集合調査を実施していただいた。

②両親の調査

親を対象とする質問紙を中学生に持ち帰ってもらい、家庭で父母（個別）に回答してもらった。後日、生徒を介して学校で回収した。

【質問紙の構成】

質問紙の構成は以下の通りである。

①中学生の調査

中高生対象の質問紙は、父との関係（4件法、13項目）、母との関係（4件法、13項目）、非行許容性（4件法、10項目）、道徳意識（4件法、10項目）、愛他性（4件法、8項目）、価値観（4件法、10項目）、恥意識（4件法、16項目）に関する質問およびフェースシートで構成された。

②両親の調査

親を対象とする質問紙は、子どもの非行に対する許容性（4件法、10項目）、子どもとの関係（4件法、14項目）、道徳意識（4件法、10項目）、愛他性（4件法、8項目）、恥意識（4件法、16項目）、価値観（4件法、10項目）に関する質問およびフェースシートで構成された。なお、本稿において分析の対象とした質問項目は、中学生の恥意識、親の恥意識、親からみた子どもとの関係である。

【調査対象者】

調査対象者は、静岡県の中学生 377 名（男子 192 名、女子 185 名）とその両親であった。このうち、親子そろって質問紙を回収できたのは父子が 187 組、母子が 220 組であった。

【調査時期】

調査は、2003 年に実施した。

【結果と考察】

1 親子関係の良否

本稿では親からみた親子関係の良否を把握するための指標として、調査において使用した項目の中から我々が従来の研究で用いてきた2つの心理的距離尺度を用いる。認知的心理距離尺度は、「子どもは何かと私に相談する」、「子どもとはうまくいっている」、「子どもは私を尊敬している」、「子どもには期待している」、「子どもは私のようになりたいと思っている」の5項目より成る。また、情緒的心理距離は、「私は子どもを愛している」、「子どもは私の宝である」の2項目である。尺度の信頼性係数は、父の認知的心理距離が.69、母が.58であった。また父の情緒的心理距離が.70、母が.67であった。 α 係数がやや低い値となっているが、これらの項目が親子関係の国際比較や経年比較を行うことを考慮して子どもを対象とする一連の調査研究で使用してきたものに対応した親向けの質問項目であることを踏まえて、そのまま後の分析に用いた。

2 恥意識の構造

① 子どもの恥意識

表1は、中学生における恥意識の項目を因子分析した結果を示したものである。恥意識に関する16項目について、複数の因子にまたがって因子負荷が高い項目を削除しながら繰り返し因子分析（重みなし最小二乗法、Kaiserの正規化を伴うプロマックス法による回転）を行った結果、固有値1以上の基準により3因子（15項目）を抽出した。第一因子は、自分の行為を自ら省みたときに恥ずかしいという気持ちを表す7項目で構成されており、「自分恥」とした。

第二因子は、他者や社会基準と自らの行為にズレが生じたときに恥ずかしいという気持ちを表す6項目で構成されており、「他人恥」とした。

第三因子は、友人らと異なる自分を恥ずかしいという気持ちを表す2項目で構成されており、「仲間恥」とした。

② 親の恥意識

中学生の恥意識と同じ方法で、親の恥意識を因子分析した結果、固定値1以上の基準により3因子（13項目）を抽出し、中学生と内容的にほぼ同じ因子構造が再現された。表2は父親の結果を示したものである。母親についても同様の因子構造を示した。

このように、恥意識は自分恥、他人恥、仲間恥の3つの要素で構成されている。自分恥は自分自身に向けられた恥意識であり、先生や社会との関係で生じる恥が他人恥である。そして、

親子関係と青少年の非行的態度Ⅲ

表1 恥意識の構造 (中学生)

項 目	因子 1 自分恥	因子 2 他人恥	因子 3 仲間恥	共通性
自分の意見をみんなにはっきり言えなかったとき	.760	-.213	.118	.368
親に口答えをして叱られたとき	.732	-.009	-.015	.512
自分で立てた目標が達せられなかったとき	.666	-.072	.075	.365
道ばたにゴミを捨ててしまったとき	.646	.116	-.076	.485
家の手伝いをしないで親に叱られたとき	.610	.110	-.067	.441
友達と遊んで夜遅く帰って、親に叱られたとき	.574	.252	-.077	.540
試験で思うような点数が取れなかったとき	.416	.120	.158	.320
授業中に騒いで先生に叱られたとき	.083	.732	-.077	.554
学校に遅刻をして先生に叱られたとき	.143	.715	-.184	.554
道徳にはずれることをしてしまったとき	-.012	.667	.024	.394
静かな病院の中で大声で話をしてしまったとき	-.067	.627	.074	.347
自分だけみんなと違うことをしてしまったとき	-.170	.600	.238	.331
並んでいる列に知らずに割り込んでしまったとき	.097	.520	.155	.414
みんなが知っていることを自分だけ知らなかったとき	.107	.123	.693	.357
誰もが持っている流行の品物を持っていないとき	-.004	-.014	.528	.202
固有値	5.80	1.55	1.18	
寄与率 (%)	38.69	10.36	7.89	
α 係数	.84	.82	.56	

表2 恥意識の構造 (父親)

項 目	因子 1 他人恥	因子 2 自分恥	因子 3 仲間恥	共通性
バスの中で大声で会話をしてしまったとき	.811	-.006	-.042	.564
映画をみているときに携帯電話がなったとき	.778	-.020	-.022	.528
静かな病院の中で大声で話をしてしまったとき	.736	.058	.000	.551
道徳にはずれることをしてしまったとき	.697	-.126	.052	.361
並んでいる列に知らずに割り込んでしまったとき	.552	.011	.133	.363
約束を守らないで人に非難されたとき	.518	.135	.024	.358
試験で思うような点数が取れなかったとき	-.054	.729	.021	.379
自分で立てた目標が達せられなかったとき	.005	.712	-.006	.391
自分の意見をみんなにはっきり言えなかったとき	.279	.485	-.207	.373
自分だけみんなと違うことをしてしまったとき	-.057	.016	.628	.244
人に失敗を指摘されたとき	.029	.307	.531	.363
みんなが知っていることを自分だけ知らなかったとき	.073	.021	.459	.188
誰もが持っている流行の品物を持っていないとき	.073	-.277	.420	.128
固有値	4.53	1.64	1.22	
寄与率 (%)	34.86	12.58	9.35	
α 係数	.84	.70	.59	

友達との関係で生じる恥を仲間恥とした。これら3つの恥意識は、項目の内容に若干の相違はあるものの、我々の一連の研究において確認されてきたものをほぼ再現している。

ところで、われわれの先行研究では、3つの恥意識と不良行為を許容する態度との関連も明らかにされている。具体的には、恥意識が高い子どもは不良行為を許容しないという傾向が自分恥と他人恥において確かめられた。仲間恥ではそのような傾向が見られない。したがって、非行的態度を抑止する恥意識は自分恥と他人恥であるということが明らかになっている。また、これらの2つの恥意識が、子どもから見た親との心理的距離の近さと関連することが確かめられている。

これらの知見を念頭においたうえで、以下では親の視点における親子関係と子どもの非行抑止要因である恥意識（自分恥、他人恥）との関連性を検討する。

3 親の視点における親子関係と子どもの恥意識との関連

まず、分析に先立って、親からみた子どもとの認知的心理距離と情緒的心理距離について、それぞれの平均値を境に親を遠-近2群に分けた。また、自分恥と他人恥について、それぞれの平均値を境に中学生を恥意識の高-低2群に分けた。

図1は、親から見た子どもとの心理的距離とその子どもの他人恥の高低の関係を示したものである。これを見ると、子どもとの認知的心理距離が遠い親よりも近い親のほうが、その子どもの他人恥は高くなることが分かる。また、子どもとの情緒的心理距離が遠い親よりも近い親のほうが、その子どもの他人恥が高くなる傾向も示されている。しかも、これらの傾向は父母双方に当てはまる。両親が子どもを愛し、子どもを宝だと考え、子どもに期待し、子どもからも尊敬の対象とされるような親子関係を築いていることが、子どもの他人恥の形成を促していると考えられる。したがって、親子関係が良好であるほど子どもの他人恥は高くなるということが親の視点においても示唆されたと言えよう。

図2は、親から見た子どもとの心理的距離とその子どもの自分恥の高低の関係を示したものである。結果は父親と母親で異なっている。まず、母親について見てみよう。子どもとの認知的心理距離が遠い母親よりも近い母親のほうが、そして、子どもとの情緒的心理距離が遠い母親よりも近い母親のほうが、その子どもの自分恥は高くなる傾向がある。したがって、親子関係が良好であるほど子どもの自分恥は高くなるということが母親の視点においても示唆される。

一方、父親については、子どもとの情緒的心理距離の遠近と子どもの自分恥の高さとのあいだには明確な関連が見られない。また、子どもとの認知的心理距離が近い父親よりも遠い父親

親子関係と青少年の非行的態度Ⅲ

のほうが、その子どもの自分恥が高くなるという傾向も僅差ではあるが見られたのである。これは、子どもの視点における親子関係の良好さが子どもの自分恥の高さと関連するという知見と正反対の傾向を示している。子どもの自分恥は、父親から見た父子関係の良好さとは関連しないのだろうか。

このように予測と異なる結果が生じた理由を探るために、我々は父親自身の自分恥の高さに注目することにした。なぜならば、父親自身の自分恥の程度が子どもの自分恥の高さに何らかの影響を与えているのではないかと考えたからである。

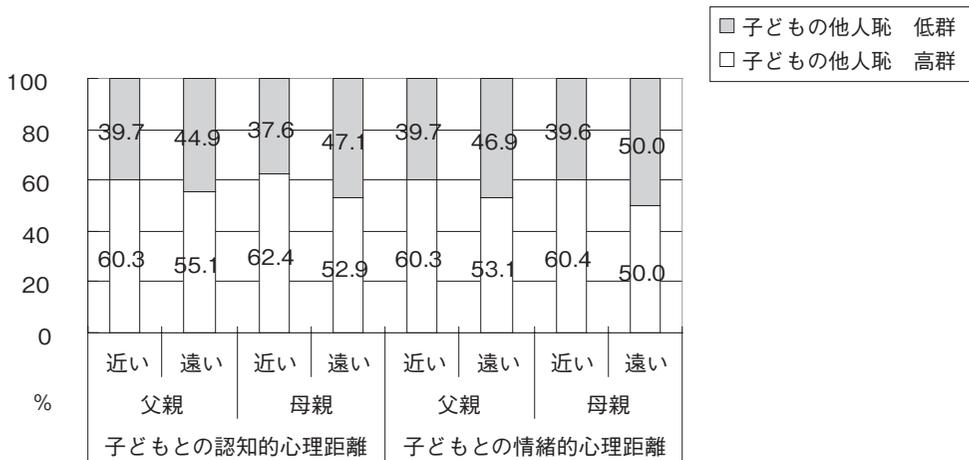


図1 親から見た子どもとの心理的距離と子どもの他人恥



図2 親から見た子どもとの心理的距離と子どもの自分恥

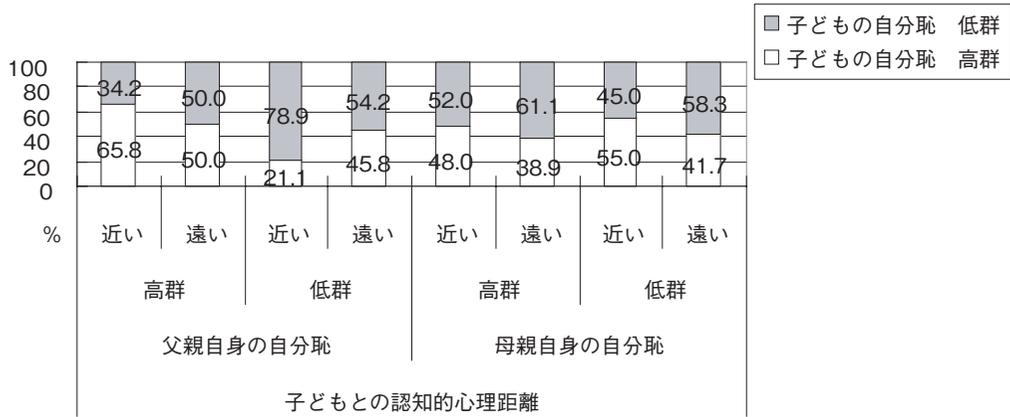


図3 親から見た子どもとの認知的心理距離と子どもの自分恥

図3は、親から見た子どもとの認知的心理距離と子どもの自分恥の関係を親自身の自分恥をその平均値を境に分割した高群と低群で比較したものである。これを見ると、母親の場合は、母親自身の自分恥の高低にかかわらず、子どもとの認知的心理距離が遠い母親よりも近い母親のほうが一貫してその子どもの自分恥も高くなっている。一方、父親の場合は、父親自身の自分恥の高低によって関係のあり方が全く異なっていることが分かる。つまり、父親の自分恥が高い群では子どもとの認知的心理距離が遠い父親よりも近い父親のほうが、その子どもの自分恥は高くなる傾向がある。これに対して、父親の自分恥が低い群では、むしろ子どもとの認知的心理距離が近い父親よりも遠い父親のほうが、その子どもの自分恥は高くなっているのである。また、全体的にみて、父親の自分恥が高ければその子どもの自分恥も高くなり、父親の自分恥が低いとその子どもの自分恥も低くなる傾向がある。このことは、親から見た子どもとの情緒的心理距離と子どもの自分恥の関係を親自身の自分恥の高低群ごとに比較した場合でもほぼ同様であった(図4)。

これらの結果は、父親から見た子どもとの心理的距離と子どもの自分恥は単純な関係にあるのではなく、父親自身の自分恥の高さによって影響される関係であることを意味する。これについて詳しく検討してみよう。図3と図4に示されているように、総じて、父親の自分恥が高ければ、その子どもの自分恥も高くなる傾向がある。これに、父からみた子どもとの心理的距離が近いという条件が加われば、子どもの自分恥はさらに高くなると言える。別の見方をすれば、父親から見た子どもとの心理的距離が近くても、父親自身の自分恥が低ければ、その子どもの自分恥は高くならない。それどころか、自分恥は最も低くなってしまふのである。つまり、

親子関係と青少年の非行的態度Ⅲ

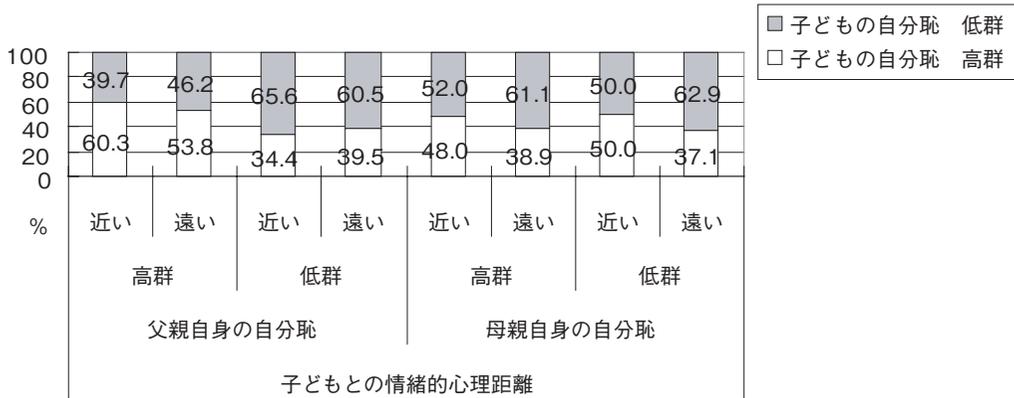


図4 親から見た子どもとの情緒的心理距離と子どもの自分恥

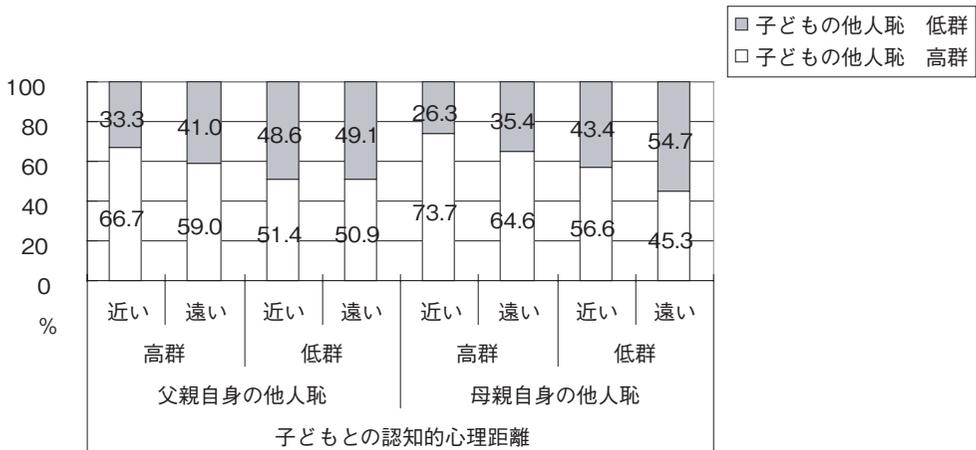


図5 親から見た子どもとの認知的心理距離と子どもの他人恥

父親自身の自分恥の高さ（低さ）が子どもとの親密さを介して子どもの自分恥に影響し、その形成を促進（抑制）すると考えられる。すなわち、“子どもは父親をモデルにして自分恥を形成する”という可能性が示唆されるのである。

一方、親自身の他人恥の高さは、子どもの他人恥とどのように関係するのだろうか。図5と図6は親から見た子どもとの心理的距離と子どもの他人恥の関係を親自身の他人恥の高低群ごとに比較したものである。これを見ると、父母に共通して子どもと心理的距離が遠い親よりも近い親のほうが、また、親自身の他人恥が高い場合のほうがその子どもの他人恥も高くなる

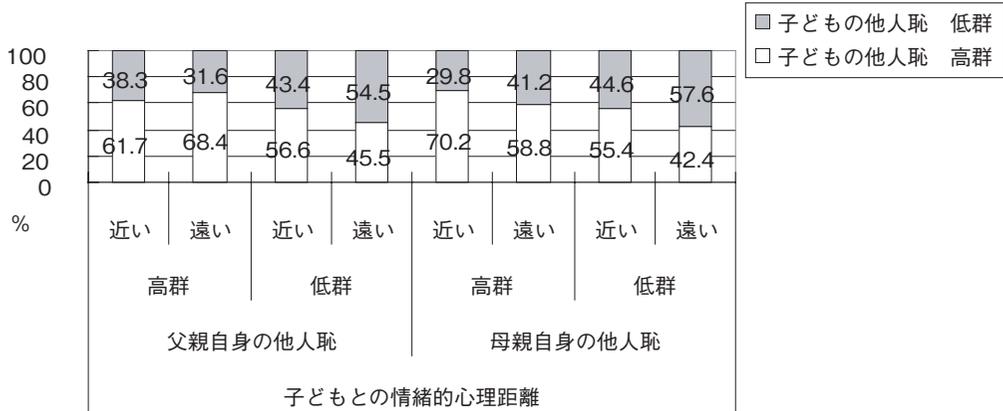


図6 親から見た子どもとの情緒的心理距離と子どもの他人恥

傾向が概ね認められる。

これらの結果は、親から見た親子関係の親密さと親自身の恥意識の高さが相乗的に働いて子どもの他人恥の形成を促している可能性を示唆する。

4 まとめと総合的考察

本研究の結果は、親から見た親子関係の親密さが、子どもの非行抑止要因としての恥意識の形成に寄与することを示した。これは、子どもの視点から見た親子関係の良好さと子どもの恥意識の関連性を示した従来のわれわれの研究結果に対応するものである。したがって、親子の心理的距離の近さが、子どもの非行や犯罪に対する抑制要因としての恥意識の形成を促している可能性を親の観点から確認することができたと言えよう。

ただし、父親の子どもに対する心理的距離の近さが必ずしも子どもの自分恥の高さと関連するわけではないことも明らかになった。その原因を探るべく分析を重ねたところ、たとえ父親から見た子どもとの心理的距離が近くても、父親自身の自分恥がある程度高くなければその子どもの自分恥は高くならないことが示された。このように、父親自身の自分恥の高さ（低さ）が親密な親子関係を基盤にして子どもの自分恥の高さ（低さ）に関連する傾向が認められたことから“親自身の恥意識は、子どもとの親密さを介して子どもの恥意識に影響を与える”という恥意識の形成過程に関する新たな可能性も見出されたと言える。この結果が示唆しているのは、子どもが親をモデルとして恥意識を形成していることに他ならない。したがって、子どもの非行抑止要因としての恥意識を高めるためには、親密な親子関係を築くこと、そして親自身

(特に父親)が恥意識をもつことが重要であると考えられる。とはいえ、本研究の結果は、ごく限られたサンプリングによる親子対応マッチング・データに基づいている。サンプル数が少ないために、統計的検定を経ずにクロス集計の結果を解釈した。また、子どもの性別分析を行わずに全体的傾向のみを示すにとどめた。本稿において示唆された恥意識の形成に関する新たな可能性を実証するためには、さらなる追試研究を行うことによって、親子関係と子どもの恥意識との関連をその形成過程を含めてさらに詳しく検討する必要がある。

【文献】

- 松井 洋・中里至正・片山美由紀・中村 真・堀内勝夫, 2005, 「非行的態度の抑制因に関する社会心理学的研究」, (財)社会安全研究財団, 平成 15 年度研究助成報告書, pp.43-56.
- 中村 真 他, 2002, 「親子関係に関する国際比較研究 (2) —親子間の心理的距離の比較—」, 日本心理学会第 66 回大会発表論文集
- 中村 真 他, 2004, 「恥意識の行動抑制力に関する研究 (3) —親に対する心理的距離が恥意識の形成に及ぼす影響—」, 日本社会心理学会第 44 回大会発表論文集
- 中村 真 他, 2005, 「親子の心理的距離と恥意識の関係」, 日本パーソナリティ心理学会第 14 回大会発表論文集
- 中村 真・松井 洋・堀内勝夫・石井隆之, 2007, 「親子関係と青少年の非行的態度Ⅱ—親子双方の視点から—」, 川村学園女子大学研究紀要, 第 18 巻, 第 1 号, pp.123-140.
- 中里至正・松井 洋, 1997, 「異質な日本の若者たち 世界の中高生の思いやり意識」, プレーン出版
- 中里至正・松井 洋, 1999, 「日本の若者の弱点」, 毎日新聞社
- 中里至正・松井 洋, 2003, 「日本の親の弱点」, 毎日新聞社
- 中里至正 他, 2003, 「非行抑制要因に関する社会心理学的研究」, 平成 13 年度～平成 14 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (2) 研究結果報告書
- 中里至正 他, 2005, 「恥意識の行動抑制力に関する社会心理学的研究」, 平成 15 年度～平成 16 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (2) 研究結果報告書